

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2017 夏 vol.124

新撰 淡海木間撰 68

絵絣の見本

INFORMATION STATION

催し案内 2017 夏

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内

特集

田上てぬぐい

— 暮らしと文化 —



特集

田上てぬぐい —暮らしと文化—

田上郷土史料館所蔵のてぬぐいと半纏
を身につけた田中初枝さん（左）と大西静枝さん（右）。右の大西さんの半纏は大きめの柄で若向け、てぬぐいも若い女性のかぶり方をしていた



大津市南部、瀬田丘陵を越えた大戸川流域に田園地帯が広がる田上地域。この地の女性たち特有の文化として根づいていた「田上てぬぐい」を紹介する企画展が、大津市歴史博物館で開催されます。

全国的にも珍しい衣生活の民俗資料を多数保存している田上郷土史料館で、同展に向けて資料整理を進めている龍谷大学の須藤護名誉教授と大津市歴史博物館の和田光生副館長にお話をお聞きました。

田上郷土史料館

住 所	大津市牧1-8-32
連 絡 先	TEL・FAX 077 (549) 0369
開 館	随時(事前連絡をお願いします)
入 館 料	無料
アクセス	JR琵琶湖線「石山駅」から帝産バス「信楽」行にて、「平野」もしくは「牧」下車、徒歩5分／名神草津田上ICから約10分



↑左の2階建てが別館（太鼓堂）

↓収蔵庫

元牧の農業倉庫（現大津市所有）で、平成17年（2005）改修のうえ貸与



↑田上郷土史料館周辺拡大図

◀田上地域周辺地図

取材／編集部 写真／辻村耕司

地元の方に教えを乞いながら、館所蔵の衣類を分類・整理しようと思っています。

大学の敷地拡張計画が変更され里山学研究に

——田上郷土史料館の東郷さん（真光寺住職）は法事ができてしまったとのことですが、お二人と田上の関わりからお話しただけですか。須藤先生は、国内・国外各地を歩いてこられたわけですが。

須藤 若い頃は福島県の会津。その後、師匠である宮本常一先生（みよもと じょういち）のふるさとの周防大島（山口県）、その周辺の瀬戸内、それから木に興味があつたので奈良県の吉野、福井の勝山や白山。木地屋（きじや）の後を追いかけた時は、滋賀県の永源寺や朽木村にも行きま

した。橋本鉄男先生にお会いして、いろいろ教えていただいたことがありますね。日本との関係が深い中国や韓国にもよく通いました

1996年に龍谷大学の瀬田キャンパスに国際文化学部ができて（2015年に深草キャンパスに移転）、これが大変おもしろい成り行きなのですが、国際文化学部も新設されてキャンパスがせまくなるといので、1994年に隣接する裏山（里山林）38haを大学が購入したんです。そこには学



大津市歴史博物館副館長
和田光生さん

わだ・みつお／1960年、滋賀県生まれ。大津市歴史博物館学芸員、大津市文化財保護課参事を経て、現職。主に近江の社寺に関する歴史民俗学的研究を行う。『高月町史 景観・文化財編』（共著）ほか。



龍谷大学名誉教授
須藤 護さん

すどう・まもる／1945年、千葉県生まれ。専攻は民俗学。樹木を活用してきた日本人の生活について研究。滋賀県の事例も収録されている『木の文化の形成—日本の山野利用と木器の文化』（未來社）ほか、著書多数。

生のための施設などができるはずだったのですが、事前の調査で、絶滅危惧種のオオタカの巣があることがわかったので開発を中止し、里山にすむ生物の調査や市民の自然観察の場として利用することになりました。その裏山を里山林としてずっと使ってきたのが、この田上地域だったんですね。

この地域の研究をさせてくださいと我々がお願いしにきたら、東郷さんがおいでになって、快く了承してくださった。その東郷さんが民具の収集・保存をしておられ史料館の収蔵品が大変すばらしいことがわかり、その調査もお願いしたんです。

——和田さんはいかがですか。

和田 大津市歴史博物館にずっとおりますので田上郷土史料館は以前から知っていましたし、東郷さんとも時々お会いしていました。亡くなられましたが、東郷さんと二人三脚で史料館をつくりあげた田村博さんは、国鉄勤務のかたわら滋賀民俗学会などでも活躍なさっていて、僕なども学生時代からお付き合ひさせていただいた方です。田村さんの民俗調査からいろいろ学ばせてもらいました。

——田上地域というのは、どんなところといえるのでしょうか。

和田 大津市は細長くて非常に特色ある地域の集合体なのですが、瀬田川の東、旧栗太郡の田上も独特な地域の一つですね。明治以降でいえば、ハゲ山を緑化させる活動や、水害防止のために砂防ダム建設が行われた先進地でもありましたし。

須藤 さらに奈良時代にまでさかのぼると、藤原京の造営に関わった田上山作所（うへやま せきじょ）があった地域です。ヒノキが搬出されて、大戸川、瀬田川を下っていきました。

和田 大津市の中でも、田上のように盆地として完結しているところは他にありません。その点の特徴といえるかもしれない。

——以前、この近くにお住まいの方が「陸の孤島」とおっしゃるのを聞いたことがあります。交通の便の悪い、周囲と切り離された地域だったのでしょうか。

須藤 いや、切り離されてはいないんです

- ※1 宮本常一（1907～1998）民俗学者。日本各地を歩き、多くの民俗誌、写真記録を残す。著書に『忘れられた日本人』など。
- ※2 木地屋 轆轤（ろくろ）を用いて盆、椀、玩具などをつくる、木地びきを職業とする職人。
- ※3 橋本鉄男（1917～1998）民俗学者。著書に『ろくろ』『琵琶湖の民俗誌』など。

よ。ここは草津方面や、唐橋がある瀬田方面との交流が非常に活発でした。

例えば、山に自生していたコバノミツバツツジという木は、非常によく燃えるので、薪としてリヤカーに積んで草津まで持っていく、山田のダイコンと交換したそうですね。だから、けして「陸の孤島」なんてことは無い。外とのつながりは非常に

全国的にも貴重な衣生活の資料

東郷さんたちによる民具の収集活動はいつ頃から始まったのですか。

和田 昭和41年（1966）10月に東郷さんと田村さんが相談して、民具の収集を始めたそうです。それらを保管するために旧集会所を真光寺境内に移築して、史料館としたのが、昭和43年（1968）ですね。この年は、明治百年（明治元年から100周年）にあたり、記念行事がさまざま行なわれた年ですが、それにあわせて史料館運営委員会を組織なさっています。

須藤 日本その他の地域でも昭和40年前後に民具などの収集活動が始まっていますね。会津、佐渡、周防大島、岐阜、岩手……。

和田 滋賀県内というと、当時の浅井町（現長浜市）で草野文男さんが庄屋屋敷を改装した民俗資料館「しりん館」^{※5}を昭和39年（1964）に開設なさっています。

衣生活の資料は、珍しいのでは？

須藤 ええ、あまりないと思います。

和田 民具といえば、農具などが主に集められて、仕事着や普段の着物の類いは収集ができていない場合が多いですね。

須藤 やはり嫌がるんですよ。所有者が提供するのを。

和田 そうなんです。古着なんてと。

須藤 だから、収蔵品はすべて新品です。ここに出してきたのは田植え用の装束など

濃かった地域です。

いま調査させてもらっている衣類や着物でも、田上は瀬田などの呉服屋さんや商店と密接に関係しています。こちらから行くこともあれば、糸や布を持って行商に来る人たちもいました。食や衣料も地域内ですべて自給自足ということではなく、外との交流の中で生活文化が育まれたんです。

で、いま80〜90歳ぐらいのおばあちゃんが、昭和20〜30年頃、嫁入りの時に持ってきた衣装なんです。ちょうど当時は、和装から洋装へ衣類が変わる時期なので、結局、着る機会がないまま、残されていたものです。私たち研究者は、着古したのを見て、どこに力がかかっているのか、どこが破れているのか、破れをどう補修しているのかとかを知りたいんですけど。

和田 でも、嫁入りのこしらえとしてお母さんや嫁ぐ本人が一生懸命織ったり、縫ったりしたものなので、大切に保存されることはよいことだと思います。

そうした衣類の中でも、「てぬぐい」が田上では特徴的なわけですね。

須藤 中世の絵巻物などを見ても布として登場します。すでに鎌倉・室町時代からかぶりものとしても普及していたようですが、いろんな用途があるんですね。濡れた手を拭くというのが本来の用途なのでしょうが、

※4 草野文男

（1906〜1985）県職員として文化事業を主導。初代滋賀会館館長、初代県立琵琶湖文化館館長などを歴任。

※5

七りん館 その後、平成6年（1994）に町へ寄贈。翌年開館した浅井歴史民俗資料館の敷地内に移築されている。

※6

ハレ・ケ 民俗学の用語で、「ハレ（晴れ）」は儀礼や祭などの特別な時間、「ケ（曇）」は普段の日常を表す。

頭にかぶることが一般的になって、その後、歌舞伎や落語などの芸能では小道具的にさまざまに使われてきました。

鼻にかけて結ぶと泥棒とか……。

須藤 田上の場合、農作業や山仕事でもちろんかぶるのですが、儀式の時も一種の正装としてかぶっていたんです。これは全国的にも珍しいと思います。

和田 ハレでもケでも、かぶることが一つのスタイルになっているというのは、他にはないんじゃないかと思いますね。東郷さんにかがってても、上田上周辺だけで、近年まで守られてきていたそうなので。

須藤 てぬぐいの素材である木綿が大量に栽培されて普及していくのは近世です。だから、先ほど中世からてぬぐい状の布はあったという話をしましたが、当時の素材は麻だった可能性もあります。絵巻物から素材はわからないので。木綿栽培は大阪平野から河内の辺りが先進地で、愛知県の三河でも盛んになります。

和田 南山城（京都府相楽郡）も産地の一つでした。

須藤 それら栽培された木綿は商品です。大坂が商都として大きくなった要因の一つは、後背部にワタや菜の花の栽培地帯があって、それらを加工した木綿や菜種油の商品化によってですね。木綿は糸と織物、また古着として全国へ流通していきます。

だから、木綿製の田上てぬぐいも業者からの購入品なのです。

須藤 だと思えます。もう流通しているわけですから。絵柄に地域性があるんです。

和田 染めも含めてつくられているのは京都なんですけれども、このデザインはほぼ田上用として染めておられたみたいで、流通したのは、この界限に限定されています。須藤 京都の北から来て野菜や花を売り歩

- A** 手甲 (田上ではテオイと呼ぶ)
手の甲や手首を保護する布
- B** 脚絆 (田上ではハバキと呼ぶ)
すねを保護する布
- C** 山仕事用の足袋
刺子を施し、強度を上げている
- D** 足袋底。

→ 早乙女 (田植えをする若い女性)
(田上郷土史料館発行『田上のあしあと』より、田村博氏撮影)



「田上見聞記」東郷常子 (東郷正文さんの母。1907～1997)
田上郷土史料館発行『田上のあしあと』(1973年) 収録

早乙女

(前略) どの田を見ても、六、七人もが横に並んで、さす手、引く足、水と泥の中で軽そうに植えて行く。私は初めて見る光景にあきず、いつまでも眺めていたのを覚えている。かすりの上着に紺の手甲脚絆、赤いたすき、三幅前だれ、前だれの端をはさむ腰のかかえ紐等水田に映えてとても美しい。笠につけた黒い紐がかぶった手拭の白とよく調和して美しく、昔の人はこんな色彩まで考えて、子孫に伝えられて来たものかと感心したものだ。



← 田上てぬぐい

左下隅に「④上林別染」とある

(上) 「篇に編蝠」。コウモリは福を呼ぶとされる吉祥文様

(下) 「蜀江に楓」。蜀江は八角形の四方に正方形を連ね、中に花文・竜文などを配した文様

いた大原^{おはら}女もてぬぐいをかぶった、独特の装束をしていますね。彼女たちのてぬぐいの文様は、田上の文様とは異なるはずですよ。

和田 あそこも、三幅^{みつば}前垂^{まへだり}れを使っているんですよ。すると、都へ出向く時の一つのスタイルが、それぞれの地域であったのかなという気がしないではないんですけど。

― 大津市なら北部の方が近いですが。 ―

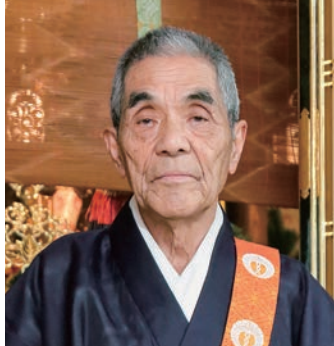
和田 地理的な距離と、文化の定着は必ずしも一致しないので。いろんな要因だろうとしかいえませんが、京都の周辺部との共通性が田上にはあるのかもしれない。

― 民俗学では、これまで研究者の多くが男性で、衣生活には踏み込まなかったという面があるのでは。 ―

須藤 ありますね。やはり男女の役割分担というのがあって、生業に関わる部分と家庭生活に関わる部分で、後者は女性が多くを担っていました。おばあちゃんがいて、縫い物をしていて、孫娘がおばあちゃんのやり方を見ながらだんだん機織りをやるようになる。布や竹細工、わら、そういう柔らかな素材は女性が得意で、その技術や管理の方法が家族の中で女性の側に受け継が

後ろ姿を見ただけで「どこのおばあやわかるわえ」

― 東郷さんがいらっしやいましたね。当時、てぬぐいはどうやって買ってたおられた



田上郷土史料館館長
東郷正文さん

とうごう・まさふみ／1937年、滋賀県生まれ。元中学校教員。真光寺住職のかたわら史料館を運営。

れています。

― これまでは記録に残りにくい分野だったのでは。 ―

須藤 今回の調査では、先ほど写真撮影でモデルになられた田中初枝さんが、どこを測ったらいいかを教えてくださいました。女性用の着物に則って測定しています。女性用の着物といっても、着丈の長さや袖の形が用途や着る季節によって違う。例えば、「鯉^{こい}の口」と呼ばれる袖は作業用なんですよ。

和田 従来の調査では、測るといったら縦（丈）と横（最大幅）くらいでしたから。

須藤 私も最初は民具の実測と同じかたちでやっていたんですよ。10枚か20枚ずつだところで、初枝さんが、「それじゃ駄目だ」とおっしゃって（笑）。これだけ詳細に測定して、着物の種類ごとの違いを明確にした調査は、私は関わったことがないし、おそらく日本の民俗資料の調査としては初めてでしょう。

週1回やっている調査には、地元の方がずっといてくれて、私たちも気楽に質問できる環境なので、衣類の分類・整理をきちんとやってみようと思っています。

― そうですか。 ―

東郷 京都に油紙や青い紙が並んだ織り屋がありました。「こめんやす」と入ると、「これが田上でぬぐいなんですんや」と言わはってあとは店側にみんなおまかせでした。瀬田にある上林呉服店と磯清呉服店という店にも卸したので、そこへも買いにいった。なんでもうちの町内にこんなぎょうさんてぬぐいが残ったかと言うと、昭和35、36年までは葬儀は土葬でしたので、家でのお勤め（葬式）が終わると、町内の人たちもお墓までお見送りをする習慣があったので、そ



↑夏の農作業などでは、日焼け防止に2枚重ねにした

の折りに「墓供養」として、お参りした人に1枚ずつてぬぐいを配ったんです。100人参列したら100枚いったのです。また頭にてぬぐいをかぶっていれば、手を鎌で切ったら、ちよっと割いて包帯にしたら駄の鼻緒を切ったら、その代わりにした、用途はいろいろありました。

― いろいろ応急処置に使えるわけですね。 ―

東郷 お寺へ参ったり、ちよっと隣の在所へ出かけるような時には、ノリのピンとはったよそ行き用のてぬぐいをかぶるのです。農作業で風がきつい日には二重にかぶって、わらひもでくくったり、いろいろしてはった。

後ろの留め方が10人いたら10人も全部違うから、年寄りには、後ろ姿を見ただけで「どこのおばあやわかるわえ」と言わはった。同じ格好は誰もおらへんと。

須藤 この牧以外でもてぬぐいはしておられたんですよ。

東郷 東の桐生^{きりゅう}だと草津に買いに行かはった。商圏^{しょうきん}がもう向こうやから。牧をふくむ上田上村は昭和30年に瀬田町に合併されて、西の下田上村は昭和26年に大津市になったけど、下田上村でも羽栗^{はぐり}・森村までは堂村から瀬田の山を越えはる。枝村から向こうは洗堰^{あらいぞめ}を渡って石山寺通って鳥居川へ買い物に出る。だから枝から里村はてぬぐいの習慣がないねん。

日本画家の小倉遊亀^{ゆき}さんが戦争中、鎌倉から田上に疎開しておられたとき、みんな

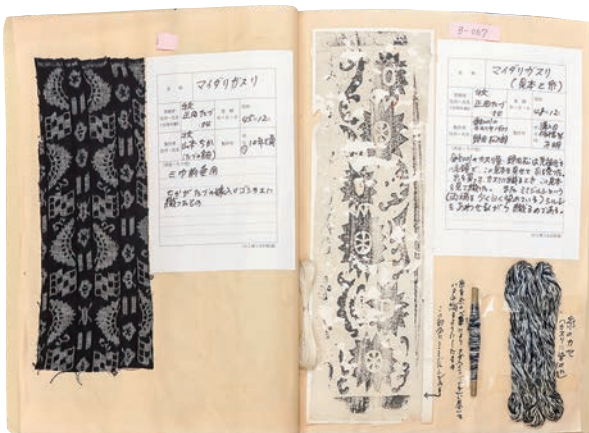


◀小倉遊亀「故郷の人達」1929年
(滋賀県立近代美術館蔵)
頭にてぬぐい、腰に三幅前垂れを巻いた田上の女性たちを描く。

→三幅前垂れ

20代女性用の四ツ目・黒絣

ひと幅（布地の横の長さの単位。約35.9cm）の反物を3枚縫い合わせて三幅にしたもので、腰に巻くと尻まで包まれる。紋様が大きいほど派手、小さいほど地味とされ、一幅に並ぶ紋様の数で年齢による使い分けがなされた（9ページ参照）。帯も赤色は若向け、年齢が上がると茶色や青色になる。



◀東郷さん作成の記録帳
名称・寄贈者・寄贈年月日・製作年・用途などが、端切れや総糸とともに整理されている。

は防空壕へ入っているのに、画板を持って、戦争に関係なく絵を描いてはったと聞いている（笑）。『故郷の人達』という、滋賀県立近代美術館に寄贈してはる絵に描かれている女性は、羽栗の人や。だらんとした方が絵になるのかわからんけれども、（てぬぐいの端を結んでいない）あれは正式なかぶり方ではない。

あの絵でもつけてる三幅前垂れは、うちの町内は黒絣が多かった。白絣はよそゆき、黒絣は仕事着。やっぱり白絣はきれいですが、

——三幅前垂れにも地域性があるのですか。

須藤 てぬぐいの範囲と一致します。滋賀県でいうと、旧志賀町の方、比良山麓でもあったみたいですけど、大津市南部では、上田上、大石、瀬田の南大萱などです。金

勝（栗東市）などに行くと、見あたらない。

——三幅前垂れの場合は、その布は買ったものなんですか。

和田 いえ、織ります。糸を買って。その箱の中に見本がありますね。

東郷 この糸と、この糸とで織つたら、こういうふうに織れますと、先染めの糸と見本の柄が刷られた紙を持って売りに来はるんですわ。言われても難しくして、わたしにもわからんけど。

ばあさんに「ええのしてる。ごつつい柄やな」言うのと、「この四つ目は若い人向けやのに恥ずかしい。見んといて」と言わはった。幅の中に四つ模様があるのが「四ツ目」、年をとるほど、柄が小さくなって、もう点線みたいになる。

——業者さんは、どこにあったんですか。

東郷 愛知川の野田松（野田松呉服店は現存。旧湖東町南清水、現東近江市）。そこから糸を売りにきて、草津に拠点置いて、上田上で一晩泊まって村内を売り回らはったんです。

きれいな好みの柄があると、「この柄は誰が買わはった」と尋ねて、これは誰々だと。「わしは絶対負けるさけ、同じ柄にはせえへん」と亡くなった親が言っていたことを思い出す。織るのは、鉛筆も紙も使わず、機の下にわらしべを縦横に置いて、それを眺めながら目数を数えて織っていたと言わはったことを思い出します。

——いつ頃まで織っておられたんですか。

東郷 戦後はないです。戦前で終わります。

「おくれえな」と、なんぼ言うたやろ

——ところで、民具の収集を始められた当時、変人扱いされませんでしたか。

東郷 田村君とまず着古した端切れを集めようと始めたんやけれど、「こんなきたないものを人前に出してもろたら恥をかくわえ」と怒られたり、それで、さら（新品）を切ると言われて止めたり、それはいろいろトラブルはありましたで。

須藤 民具を収集した方には、わりとお坊さんが多いんですよ。佐渡島の林道明さん（称光寺住職）という方も拝み倒して収集したそうです。それらの民具をもとにできた佐渡国小木民俗博物館には、農具と漁具が3万点ぐらいあって、船大工道具が国指定重要有形民俗文化財になっています。その林住職と教育委員会に理解のある人がいて、2人がリヤカーを引っ張って回ったそうなんです。田上にも東郷さんと田村さんという2人がいて、僕はまったく同じだと思っただけです。

東郷 「おくれえな」と、なんぼ言うたやろ。それを織ってくれた親元の母親の名前などを記録しているうちに、誰と誰が姉妹でという、今はなき人の関係もわかり、家系図をつくるものにもなりました。「あっぱあさんをえらそうに言うわえ」というと、「わしは血がかかったるわえ」と。なるほど、

——7月22日から大津市歴史博物館で開催される企画展の内容などについて、和田さん、教えていただけますか。

和田 須藤先生とその研究仲間が進めてこられた調査の成果を中心にしていこうと考えています。てぬぐい以外にも、緋などの着物、衣生活関係の資料、その他女性の生

それを知っておくと、あそこに行つて、あのおばあの悪口は言えへんなとかわかるようになって（笑）。

——だいたい在所内で結婚していたということですね。

東郷 そう。もう瀬田の向こうから来はったら国際結婚みたいなもんやから（笑）。

——東郷さんのお母さまは遠くからいらっしゃってますよね。

東郷 母は、大阪で生まれ育ち、大正15年（1926）に嫁いできました。というのは、もともと先々代ぐらいは田上に住んでいた家で。いったん大阪へ出たが、やはり田上に一人置いておかなあかん、縁が切れたらあかんということで、うちの母が来たもんで。それで、この在所へ来たら、「こめんやすてぬぐいもかぶらんとすみません」と言つて入ってきたので、うちの母親はびっくりしたそうです。

——カルチャーショックを受けたと。

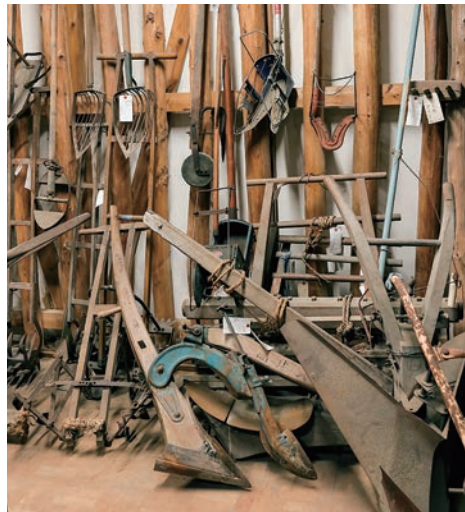
東郷 考えてみたら、「角隠し」ですな。どこでもかぶっているのが、女としての身だしなみやとされたんでしょう。本堂に参る時でも何でも皆かぶってはる。全部さ・らで、バンバンパンとノリをつけてあって、それはきれいだった。そういう場面を写真に撮っておくとよかったけど。

開館から半世紀の区切りとして

活にまつわる道具類。それから田上郷土史料館にある民具類の中からいくつかピックアップして展示しようかと思っています。夏休みもふくまれる開催期間なので、小学生が見ても楽しんでもらえる、珍しがってもらえるようなものを選びようかと。

——おもしろい道具がいろいろありますね。

◀ 田上郷土史料館収蔵庫の内部



須藤 かき餅を焼く火鉢、講がある時に持っていく弁当箱など、いろいろありますよ。**和田** それから、今日、東郷さんご本人にもいろいろお話しいただきましたが、東郷さんと田村さんらが地域の方々との協力のもとで作り上げた田上郷土史料館が、いままで半世紀ものあいだ活動なさってきたことを来館者の皆さんに知ってもらいたいと思います。

東郷さんたちはとにかくまず集めることに専念してやられたんですけれど、それらの価値に注目なさった須藤先生に、もう一度掘り起こしていただいているので。

須藤 整理させてもらっただけですけど。

和田 いえ、そのおかげで広く知ってもらう準備ができました。

——うまい巡り合わせで、所蔵品にスポットライトが当たりましたね。

和田 開館から半世紀の区切りとしても、ちょうどよかったと思います。

須藤 まだ全体の3割ぐらいしか整理できていませんが、本当に宝物だと思っています。

——企画展が楽しみです。本日はありがとうございました。

（2017.5.24）

絵絣の見本

大津市歴史博物館副館長 和田光生

田上郷土史料館には、衣生活資料が多数収蔵されています。なかでも女性が腰に巻いていた「三幅前垂れ」（7ページ写真）は、さまざまな絵絣で織られており、華やかな印象を与えます。絵柄は、年齢によって使い分けていたそうで、若者は大柄で一幅に1列で4つほどの絵柄が見られる「四ツ絣」、高齢になるほど小柄となり「十六絣」など、年齢に合わせて使い分けていました。

古くは総糸を数か所しばって藍染した「ククリ絣」が織られていたようです。そのころは十字や井形など簡単な図柄だったようですが、明治時代後期以降に絵絣が広がるようになります。もちろん自家製で絵絣を織り出すことは難しく、絵絣糸を購入して織っていました。田上地方には、湖東から絣糸を売りに来ていたようです。麻絣が盛んだった湖東地方の技術を生かし、木綿絣用の糸を作成し、販売に來たのです。手機で織るので、緯絣ばかりでした。

絣糸は総にして売られますが、それがどのような模様の糸か見ただけではわかりません。そこで糸と一緒に織り上がりの図案を添えて販売されていました。織る時は、この図案を見ながら織り上げたのです。田上郷土史料館には、織り上げた三幅前垂れやその端切れなどとともに織り上がり見本の図案も収蔵されています（7ページ左下写真）。絵絣は、紺地に白で絵柄を表す黒絣と白を地として、紺で絵柄を表現する白絣があり、上田上牧町では白絣が好まれました。

三幅前垂れなど伝統的な服装も、戦後大きく変貌し、その多くは廃棄され、資料として残ることも稀でした。田上郷土史料館は、こうした失われやすい衣生活資料を意識して収集し、その調査研究も重ねてこられました。絵絣の問題も、田村博望氏の「郡田新蔵創案の板締絣」（『民俗文化』第381号、平成7年、滋賀民俗学会）でまとめられています。



↑絵絣の見本



→図柄は異なるが、織りあげられた木綿絣



↑柄の見本とともに販売された総糸

たなかみ

田上てぬぐい
—暮らしと文化—7月22日(土)～8月27日(日)
大津市歴史博物館

大津市の南
部に位置する
田上盆地は、
豊かな田園の
広がる農村で
す。かつてこ
の地方で使わ
れていたてぬ
ぐいは、年齢
にあわせた模
様が染められ、
正装にも使われ
るかぶり物です。



山仕事の服装

こにてぬぐいをはじめ、田上地方の衣生活の諸相、またかつての生活文化について紹介します。

入館料：大人320円、高大生240円、小中生160円
休館日：月曜日、祝日の翌日

■関連講座

「田上てぬぐいと田上の衣生活」
7月22日(土) 午後2時～3時30分

講師：須藤護氏(龍谷大学名誉教授)

申込締切：7月12日(水)

定員：100名 参加費：500円

田上てぬぐいを切り口に、田上地域の女性のかつての生活の諸相を紹介します。

■関連講座

「上田上の生活文化を語る

—田上郷土史料館のあゆみ—

8月5日(土) 午後2時～3時30分

講師：東郷正文氏(田上郷土史料館長)

聞き手：和田光生(本館副館長)

申込締切：7月26日(水)

定員：100名 参加費：500円

開館後、民具収集をはじめ、調査の成果を「田上郷土史料館 報館」としてまとめるなど、精力的な活動を続けてこられた同館のあゆみと、田上地区の民俗の魅力などをうかがいます。

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

■「立体切紙」体験教室
8月13日(日) 午前10時30分～
午後1時30分～

講師：大東守氏

対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

定員：各回20人 参加費：500円

■昆虫竹細工教室

8月6日(日) 竹でクワガタ作り

8月27日(日) 竹でカマキリ作り

午前10時30分～、午後1時～、午後2時30分～

講師：牧寺敬久氏

対象：6歳以上(小学生は保護者同伴)

定員：各回10人 参加費：1000円

お問い合わせ先：TEL 0748 (23) 0081

小さな淡水生物の素敵な旅

7月15日(土)～11月19日(日)

滋賀県立琵琶湖博物館



湖などの淡水にいる小さな生物は、乾燥した土地や、海などの場所をこえて、別の場所にある淡水へ移動して生息場所を広げてきました。本展では、そのような小さな生物の移動方法の不思議について紹介します。

観覧料：大人200円、高大生160円、小中生100円

大どじょう展

—滋賀のドジョウ・日本のドジョウ—

7月15日(土)～9月3日(日)

滋賀県立琵琶湖博物館

滋賀県内にすむ10種類のドジョウのほか、北海道や九州にしかないドジョウが大集合!! ドジョウにまつわる不思議や人との関わりについても紹介します。

観覧料：常設展示観覧券(大人750円、高大生400円、小中生無料)でご覧いただけます。

休館日：7/3、10、8/7、9/4～8、11、25

お問い合わせ先：TEL 077 (568) 4811

じゅうにん という

十人陶色

—豊かな色の世界展—

開催中～9月24日(日)

滋賀県立陶芸の森 陶芸館

明るくポップな色合いや落ち着いた色の深み、また白黒の対比美と焼締め陶の炎がつくる色の表情など、土と釉薬を焼くこと(焼成)で生まれる〈やきもの〉の豊かな色の世界……。当館所蔵の国内外の現代作家の作品を取り上げ、十人陶色なくやきもの〉を、原料や技法の解説を交えながら紹介します。

ウーゴ・ネスポロ
「トーストとロースト」宮下善爾
「風」

入館料：一般450円、高大生300円、中学生以下無料

休館日：月曜日(ただし7/17、9/18は開館、7/18、9/19が振替休館)

■ギャラリートーク

7月16日(日)、8月20日(日)、9月17日(日)
午後1時30分～2時30分

参加費：無料(入館チケットの提示が必要)

お問い合わせ先：TEL 0748 (83) 0909

紙と竹で作るいきものの世界

—昆虫と恐竜たち—

7月13日(木)～8月29日(火)

世界風博物館東近江大風会館

1枚の紙をハサミで切り、曲げや折り等を入れて「命を宿す」立体切紙作家大東守さんと、竹細工体験教室など多数開催する竹細工作家牧寺敬久さんが製作した昆虫や恐竜などの立体切紙と竹細工を展示します。

入館料：一般300円、小中生150円

休館日：水曜日、7月18日、8月22日

■「立体切紙」実演会

7月16日(日)

午前10時30分～

午後1時30分～

講師：大東守氏(立体切紙作家)

申込：不要(入館料が必要)





八日市民謡 江州音頭

ようの
丁野永正 著

B 6判並製本 総214頁 非売品

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25(著者)

山伏の歌祭文に始まるとされ、明治期には大阪で一大ブームとなった江州音頭の歴史、踊り方と歌詞、影響関係にあった踊りや歌謡などをわかりやすく紹介。(2017. 4. 20 刊)

相応と良源 —湖北の天台文化—

7月29日(土)～9月3日(日)

長浜城歴史博物館

回峯行の祖・相応、比叡山中興の祖・良源(元三大師)は、いずれも長浜出身の天台僧です。二人の業績とともに、湖北の村々に受け継がれてきた多くの観音像を生み出す礎となった天台文化に関する資料を紹介します。

入館料: 大人400円、
小中生200円

休館日: 会期中無休

■関連講座

「湖北の天台僧 相応と良源(仮)」

8月20日(土) 午後1時30分～

講師: 武覚超 師(叡山学院教授)

会場: 市民交流センターふれあいホール

お問い合わせ先: TEL 0749 (63) 4611



絹本着色 慈恵大師像(本館蔵)

会場: 安土城考古博物館セミナールーム
定員: 140名(当日受付午後1時～ 先着順)
資料代: 200円
お問い合わせ先: TEL 0748 (46) 2424

生涯一画家 北村富三展

7月22日(土)～10月9日(月/祝)

東近江市近江商人博物館・中路融人記念館

明治36年、東近江市五個荘に生まれた北村富三。常に画家として模索と研鑽をかさね、画の求道者として多くの作品を残しました。生まれつき病弱な身体をもちながら、自らの命を移行するかのように描きつづけた富三の作品とその生涯にせまります。

入館料: 大人300円、小中学生150円

休館日: 月曜日(9/18、10/9は開館)、9/19(火)

■ギャラリートーク

9月9日(土) 午後1時30分～

お問い合わせ先: TEL 0748 (48) 7101



風の子通信

宮腰悦子 著

A 5判並製本 総324頁 非売品

問合先 TEL 0749 (65) 6479 (株エツコ・ワールド)

中日新聞折込紙「さざなみ通信」連載コラムの書籍化。保育園・幼稚園へ紙芝居の巡回活動を行った著者が、身のまわりの出来事や少女時代の回想などを綴る。(2017. 7. 1 刊)

開館25周年記念 第56回企画展 近江の城を掘る

7月15日(土)～9月18日(月/祝)

滋賀県立安土城考古博物館

近江には1000か所を超す城跡があります。しかし、内部構造や築城・廃城年など、実態がわかる事例はそれほど多くありません。本展では、発掘調査された城跡を網羅的に取り上げ、近江の城の変遷や特質を紹介します。

入館料: 大人500円、高大生300円

休館日: 7/18(火)、8/28(月)、9/4(月)、9/11(月)

■関連博物館講座 各回 午後1時30分～

7月26日(水)「守護所から観音寺城へ」

講師: 才本佳孝 氏(近江八幡市)

8月2日(水)「京極氏の城 小谷城」

講師: 北村圭弘 氏((公財)滋賀県文化財保護協会)

8月9日(水)「甲賀の城」

講師: 木戸雅寿 氏(滋賀県教育委員会)

8月23日(水)「六角氏家臣の城」

講師: 福永清治 氏(野洲市教育委員会)

8月30日(水)「坂本城から大津城へ」

講師: 吉水眞彦 氏(大津市教育委員会)

9月6日(水)「水口岡山城から水口城へ」

講師: 小谷徳彦 氏(甲賀市教育委員会)

9月13日(水)「城郭石垣の成立と展開」

講師: 北原治 氏(滋賀県教育委員会)



関津城跡 全景
(滋賀県教育委員会提供)

西野水道探検

8月11日(金) 午前9時～12時
湖北野鳥センター



江戸時代に余呉川の氾濫による水害を防ぐために掘られた西野水道を探検しながら、出口の琵琶湖岸までを自然観察します。



集合 湖北野鳥センターで受付(9時～9時30分)
日程説明などの後、西野水道まで移動し、水道・湖岸を観察、まとめのあと現地解散。

参加費 大人200円、小人100円、幼児無料

持ち物 長靴、水筒、雨具(カッパ)、観察道具(あれば)
少雨決行(内容変更の可能性あり)。荒天中止。

お問い合わせ先 TEL 0749 (79) 1289

琵琶湖博物館ブックレット4 琵琶湖の漁業いま・むかし

山根 猛著
A5判並製本 総118頁 1500円＋税

縄文時代早期の遺物や中世以降の絵画・文字記録などをもとに、多様化する網漁やエリなどの漁労技術と、消費地の嗜好にあわせて限定されていった魚種の変遷をたどる。



おうみ 淡海文庫58 京近江の豪商列伝

京都新聞社 編
B6判並製本 総226頁 1500円＋税

2002年5月から2003年5月まで同タイトルで京都新聞紙上に連載された記事を単行本化。角倉了以、三井高利、外村與左衛門、小野善助など、江戸時代から明治時代にかけて活躍した豪商40名余りの事績と経営哲学を紹介。



淡海文庫31 近江商人学入門 改訂版 さんぽう CSRの源流「三方よし」

末永國紀 著
B6判並製本 総214頁 1500円＋税

近江商人の経営理念「三方よし」をもとに、CSR（企業の社会的責任）をわかりやすく解説したロングセラー（2004年刊）の改訂版。その後の研究成果を取り入れ、巻末に索引を追加。



そうこう 巡航 聴診器とラテックス

溝尾節子 著
四六判並製本 総134頁 希望者配布
問合先 TEL0749(22)0627 (サンライズ出版)

晩年の父の話から始まったルーツ探訪。誤解から息子と縁を切った夫に対して裁判を起し明治女の気概を見せた曾祖母。渡米した息子の苦難の起業物語など、4篇を収録。(2017. 6. 24刊)



観光都市中心部の再構築 滋賀県長浜市の事例研究

大橋松貴 著
A5判上製本 総198頁 2800円＋税

衰退していた商店街を観光地として復活させた長浜のまちづくりにおけるNPO法人まちづくり役場と長浜まちづくり株式会社の組織運営、役割、そして問題点について考察。



近江を愛した先人たちの言葉 人生の四季と向き合うヒント

洲上清二 著
四六判並製本 総256頁 2200円＋税

近江と関わりのある戦国武将や実業家、芸術家などさまざまな分野の偉人が残した言葉を、人生の四季（青春、初夏、白秋、玄冬）に当てはめ、1ページ単位で解説。



ひい 「日出づる国」の山と海 大和・出雲・伊勢「東西」「天地」の信仰軸

伊藤通子 著
四六判並製本 総276頁 1900円＋税

東と西を聖なるものとする「東西信仰」と、天地を結ぶ「柱を立てる」祭祀は、どのように生まれ、受け継がれてきたのか。そのルーツを探り、「神道」と稲作との密接な関係にふれる画期的な論考。



長浜ものがたり大賞コレクション

「長浜ものがたり大賞」実行委員会 編
A5判並製本 総384頁 900円＋税

長浜市を舞台にゆかりの人物が登場する「長浜ものがたり大賞」受賞作品（マンガ12篇、シナリオ5篇）を収録。「石田三成の青春」（原作：松本匡代）など、プロ漫画家作品も掲載。



7月
下旬
発売

表紙写真 大津市牧にて、田上でぬぐいをかぶった女性（再現）

編集後記 田上の早乙女装束の女性たちは、こづかい稼ぎに遠方まで田植えに出かけていたそうです。田植え姿を見そめた男性から、ぜひ嫁にという話があったりしたのかと尋ねると、そうではなくて、意識していたのは集落内の女性同士だそう。女性がおしゃれをするのは異性よりも同性の目を気にするという説はやはり正しいようです。今も昔も男の多くは、衣類の柄や形の違いなどには無頓着。ゆえに私も妻の機嫌をそこねつづけるわけです。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先